

水難への祈り

～川の安全を祈願する石塔～

埼玉県には数多くの石塔が立てられ、川の安全を見守っています。



共有石橋三十有所供養塔（熊谷市）



和田橋左岸にある橋供養塔（熊谷市）



香林寺の橋供養塔（東松山市）

石橋供養塔

埼玉県にはあちこちに石橋供養塔が残されています。その数は現存するものだけで300基を超えます。これらは江戸中期から明治初期に建立されたものが大半で、その形状は墓石に似た角柱型のもの、自然石を利用したもの、石仏型のもの等多様です。建造の目的は必ずしも明確ではありませんが、①流失、あるいは退役した橋の供養 ②新しい橋が長持ちするための祈願 ③通行人の安全祈願 ④橋の建設工事の殉職者や溺死者の供養等とされています。石橋供養塔は埼玉県を中心とした関東地方に集中して分布しており、江戸時代の関東地方の民間信仰を考える上で重要です。

▶ 橋の安全や道を行き交う人々の無事を祈って建てられた供養塔

正面上部に浮き彫りの馬頭観音を刻むこの供養塔は入間川2丁目の菅一自治会館前にあり、1781（安永10）年3月に造立されたものです。かつてはここから100mほど手前の赤間川にかかる菅原橋のたもとにありましたが、橋の拡幅工事により現在地に移転しました。

右側面に「小沢忠右衛門」や「講中」などの文字を刻むこの供養塔は、橋の安全や道を行き交う人々の無事を祈って建てられたものです。石橋をかけるには大変な資金と労力を必要としましたが、それにもかかわらず進んで供養塔を建てたのは、仏教という作善（さぜん）、つまり善を施すことが仏の道に適うと考えられていたためです。



石橋供養塔（狭山市）

▶ 長瀬周辺の結晶片岩を利用した青色の塔婆

板石塔婆は、13世紀はじめの鎌倉時代から、16世紀末の江戸時代のはじめにかけて全国に見られる石製の供養塔の一種です。関東地方では、制作された板石塔婆の多くの石材が、長瀬周辺の結晶片岩を利用したと考えられており、「青石塔婆」とも呼ばれ、深谷市指定文化財とされています。

この板石塔婆は、死者に対する追善供養や、死後における極楽往生を願って盛んに製作されました。この時期、仏教が当時の武士たちに鎌倉仏教として広く信仰され、武蔵武士の本拠地であった埼玉県内には現在、約2万基にのぼる板石塔婆があり、質・量ともに全国一の規模を誇っています。45基もの板石塔婆が残っている所は市内ではここだけで、非常に貴重なものです。

荒川地内には、鎌倉～室町時代の寺院が存在していたという伝承もあり、隣の寄居町にある鉢形城との結びつきも強かった地域といえるでしょう。



長瀬周辺の結晶片岩を利用。民家のわきに45基が集められています

▶ 都幾川の安全を見守る水神様

上唐子地区都幾川北岸、月田橋の手前に、支流槻川を含む都幾川筏運中の建てた水神塔があります。横30cm、縦29cm、高さ80cmの石塔で、前面に水神塔、横に上唐子筏運中と刻されています。台座は、横64.5cm、縦62.5cm、高さ35.5cm。側面にはこれをまつた筏運中17ヶ所、48名の氏名が刻されています。この人々は、川ばたの元締めを中心にした筏関係者で、この塔は文政年間の建立と伝えられています。

当時は、都幾川すじの山からかりだされた木材（主に松材）がサナガシ（伐採されたままの状態に川に流すこと）され、下流の月田橋、鞍掛、稲田橋の土場でかりだしされ筏に組まれ、東京は千住を通り深川の木場まで届けたそうです。水神様をまつたのは、このあたりが川幅広く、よい筏かけばで、渡し船場であったからだと言われています。（東松山市指定文化財）



月田橋を北岸にわたるとすぐ案内板が建っています

アクセス

荒川の板石塔婆

交通：秩父鉄道「小前田駅」下車、徒歩約15分

住所：埼玉県深谷市荒川



荒川の板石塔婆

